

# 長男、次男の不登校、ひきこもりと闘って

〔全国ひきこもりK H J親の会〕 豊島区支部「楽の会」  
ひきこもり支援相談士

佐藤 正子（仮名）

## 転校先でのいじめと不登校

私には二人の息子がいて長男が小学五年、次男が小学校入学を迎える春、夫の転勤により東京から西日本のある都市に転居しました。何の不安も心構えもなく、今までと同じ生活の延長線で「知らない土地で新しい生活が始まるだけ」との転居が、「二人の長期ひきこもりを抱える」という過酷な道を歩むことになるとは思っていませんでした。

最初の異変は次男でした。

朝になって起こしても、気持ちが悪いい、頭が痛いなど一向に身支度をしない次男は、私が学校に欠席する旨の電話連絡を済ませると元気になるので

す。食欲もあり、日中はゲームなどで遊んで過ごし「明日は学校に行くから」と言うのですが、次の日も朝になると体調不良を訴えるという繰り返しの日日に「怠け癖がついたのでは？」と思うようになりました。

ある日、同級生のお母さんが訪ねて来て、クラスでのいじめを伝えられました。「うちの子は〇〇君に命令されてお宅の息子さんをいじめていました。そのストレスでチック症になり病院に通っています。他にもお宅の息子さんをいじている子が病気になるています」と言うのです。私は次男の心中を思うと胸が張り裂けそうでした。その後、何度も学校に掛け合ったものの協力は得られず、結局、不登校になって

しまいました。

一方、長男は転校先の小学校を卒業後、公立中学校に入学しました。ところがある日、真つ青な顔で帰宅して震えているのです。「学校で数人に囲まれて崖から突き落とされそうになった」とのことでした。

学校があるのは眼下に市街が一望できるとさるような山頂。そんな山の上から突き落とされたら命に関わります。たまたま一部始終を見ていた生徒が職員室に駆け込み、先生方が現場を押さえ事なきを得ました。

翌日、中学校では全生徒を体育館に集め集会が開かれたようですが、長男はその日から体調を崩し精神的にも極度の不安定状態となりました。長男

に対し心から温かく接してください。先生もおられて、その先生の授業だけは出席したい、という本人の希望もあり、私が車で送り迎えをするという通学でした。しかし、それも長くは続かず、ついに登校できなくなり、自宅から八キロほどのところにある教育相談所に通うようになりました。

### それぞれの思いで 戻ったもの…

四年間の転勤生活を経て東京に戻り、長男は中三、次男は小五としてそ



れぞれの学校手続きも済み落ち着いた生活ができるかと思いきや、次男はどうしても学校に行きたがりません。小学校には幼稚園の時の友達もいるし、すんなり溶け込めるのではないかと軽く考えていました。

しかし四年間のブランクはこのほか大きく、家庭の中でのんびりしていた我が子と夜遅くまで塾通いが当たり前という風潮の地域に過ごす子たちとの学力の差は著しかったのです。私も登校に付き添っていたものの、どうしても行かないと言うようになりました。

その一方、長男は中三ということもあり、親の意識はだんだん長男に集中していました。ところが、この頃より長男の様子がおかしくなってきました。転校して間もない頃、まだ持っていなかった副教材を隣の席の女生徒に見せてほしいと頼んでも無視され、誰も口を利いてくれなくなったことがきっかけでした。家に帰ると「カッコいい男に生まれていれば、いじめられないはず」と頭を壁に打ち続けたり、壁を激しく叩くようになりました。

精神科のクリニックに連れて行くと、投薬とカウンセリングによる療法で多少落ち着きを取り戻したかのように見受けられました。しかし、クリニックに数カ月通った頃、突然「旅に出たい」と言い出しました。漠然とした不安に

かられた私は、医師に相談しましたが、「今後息子さんの身に何か生じててもクリニックに責任はない」と強く主張されたことだけが印象に残り、納得のいく説明は受けられませんでした。

それ以降、私は精神科の医師に対する不自信を持ってしまったのです。自分自身のことも含め相談にのつてくれるようなクリニックを探せばよかったのかもしれませんが、当時の私にはこの一件で「見捨てられ感」が増し、気持ちちは萎えていくばかりでした。

その後、長男は全く登校しなくなり家で過ごすようになりました。高校進学を担任に相談するも「出席日数が足りないので普通高校への進学は無理」とのこと。通常の全日制高校へは進学できなくてもフリースクールという選択肢があることを紹介され、そこに行くことにしました。

長男は前向きに通うようになったものの、このフリースクールが自分の今までの学力を補い大学進学を目指すものではないことを知り、同級生たちからの距離感に苛まれるように感じたからか、抑えきれない本人の不満の矛先は、家族に向けられたのです。

### 精神的、肉体的な限界

私は長男に真夜中であろうと起こされ、その前に座らされました。二時間

でも三時間でも延々と話し続け、ついウトウトしようものなら「自分の話をキッチンと聞いて欲しい」とまた続く。本人が怒り疲れると自室に入るの、それまでの辛抱と私は付き合いました。

ある夜、バットを持った長男が夫の寝室に入って行く姿が目に入り、私も後を追いました。寝ている主人の頭にバットを振り下ろそうとした瞬間、私は夢中で長男を後ろから羽交い絞めにし、「この人は本当の父親ではない！」と言ってしまいました。もちろん咄嗟の嘘ですが、驚いて振り向いた長男から「どういことだ」と追求されました。

リビングで長男と向き合い、「本当のことはあなたの二〇歳の誕生日に話す」と言い自室に戻しました。精神的に不安定な息子でもせめて二〇歳までは生きていてほしいという、常に心の底で願っていた思いが言葉になってしまったのです。

その後、長男がバットを持ち出すことはありませんでしたが、私に対する不信感はエスカレートしていったようです。大学病院での精密検査という形をとって心療内科の先生から内科病棟へと入院させていただきましたが、病院での本人は至って平静であつたらしく「異常なし」で退院しました。けれども私に対してだけの不信感はぬぐえなかつたのです。

私は体調を崩し胃潰瘍と診断されました。どんな治療をしても胃の激痛は治まらず、精神的にも肉体的にもそろそろ限界かと感じていました。夜明け前、ベランダに出ては東の方向を見つめ「どうか夜が明けなくてください。朝が来たらまた地獄のような一日が始まってしまふ。お願いですから日が昇らないでください」と毎日手を合わせていました。愚かなこととはわかっていても、祈らずにはいられなかつたのです。

もはや限界に達していた私は、ある覚悟を決めました。「兄ちゃんの首を絞めてからお母さんも死ぬ」と次男に話すと「僕もお母さんと一緒に行く」と言つてうなずきました。「最後の夕食は何にしようか？」と聞くと「松阪牛のステーキ」と答えたので、私は近所の肉店に行きました。注文した松阪牛がなかつたので、代わりに三田牛を買ってきました。夕食を済ませ、いよいよ決行という段になって、次男が「やっぱり松阪牛が食べたかった」とポツリ。「ああ、この子は死にたくないのだ」と気付かされ、もう少しだけ頑張つてみようと思ひ留まりました。

### 一軒家を買ってほしい

そんな長男が今度は「家がほしい」と言うようになりました。

ある日、夜になつても帰宅せず、心配が頂点に達してしていたところに公衆電話から電話をかけてきて「気に入った家が見つかった」と言うのです。しばらくして帰宅した夫に「兄ちゃんが家を買ってくれと言っている」と伝えると、突拍子のない要望を理解できない夫は、顔を真っ赤にして怒り出しました。「何で家を買わなければならぬんだ！ 実家もあるし、このマンションだつて会社が社宅として借り上げてくれている！」と最大級の激怒です。

けれども私は一步も引かず「明日が見えない苦しみを、なぜわかつてやれないの？ 家はどんなに高くてもお金で買える。反対なら離婚します！」と反論し、次男とともに家を出る準備を始めました。私も本気で夫に怒りを覚えたのです。

これまで夫は、私や子どもたちがどういう状況にあつてどのような苦しんでいるか、真正面から向き合うことなく、仕事に逃げていました。だから、子どもも父親を避けていたのです。私が炸裂した悲しみを夫に向けていたその最中に、再び長男から電話がかかってきました。「お父さん、帰つて来た？」と尋ねる声に何と答えようか戸惑っていると、夫が「明日、家を買に行くとぞ！ 一緒に行くから今すぐ帰つて来



### ひきこもり同士の兄弟対立

「い」と、電話の向こうに聞こえるような大きな声で叫びました。翌朝、住宅情報誌を手にした一七歳の長男をはじめ家族全員が最寄駅のホームに立っていました。貯蓄などなく、住宅ローンの負担は家計に重くのしかかりましたが、夜が明けるのすら怖かった私にとっては、わらをもすがる思いでした。

スクールに籍を置くものの、大学進学を望むのであれば学力が足りません。私立大学進学のための通信講座を受講することになりましたが、授業に全くついていくことができず、成績は全国最下位クラスという惨たんたる有様でした。ある日、私は長男を連れ学生街である御茶ノ水駅に降り立ちました。長男が目標としていた大学を実際に一度見てほしかったのです。門の前に佇み、このような立派な大学には入れずとも活気ある学生街をいつかきつと学生と

して歩く日が訪れてくれるように心の底から願いました。

その後、長男はフリースクールと提携している通信高校の卒業単位の修得を目標に、再出発することになりました。何とか自宅での勉強を始めてはみましたが、思うようにいかないようで、極度のイライラ感情を起こすこともしばしばでした。

次男は都立の「不登校・ひきこもり対応の新設高校」に合格しました。合格の喜びも束の間、次男は二週間も経たないうちに学校へは行かなくなりました。

そんな次男に対し長男は、学校に行かないと後々学力面で苦労するという自分の姿と重ねて、批判するようになりました。次男は次男で長男に散々家族ごと振り回されてきた不満が募り、兄弟同士で対立するようになりました。兄弟同士で一切口を利かないという凍りついた関係から次男は自室にひきこもるようになり、高校合格から七年間、本格的なひきこもりとなったのです。

### 猫の効果

次男が小学五年生のとき「猫を飼いたい」と言い出したのがきっかけで、子猫をもらって飼うことになりました。ささいなきっかけで飼い始めた猫です

が、その可愛いしぐさに家族皆が本当に癒されました。アニマルセラピーという療法もあるように、小さなあどけなく可愛い猫がただ寄り添ってくるだけで、ずさんだ心が和みました。

折々に猫の写真を撮ったり、猫の誕生日には必ずパースデイケーキを買って皆で祝うなどしているうち、家族の大切な一員となりました。不思議なことに、猫は家族のところが順番に回ります。昨日は長男のところ、今日は次男、翌日は私のところと日替わりで寄ってきます。だから、家族間がギク

シヤクしているときも猫が間をとりもつてくれます。この不思議な行動には驚きました。

### 母親の行動から意外な展開へ

次男は高校へも行けないし、長男もどうなるかわからない：そんな日々を過ごしているうち、私自身のことも考えるようになりました。四〇代半ばを越え再び社会に出るチャンスは今しかない、デパートのパート契約社員として働き始めました。外に出ることで、私自身の生活にも張りが出てきました。



けれども子どもたちは相変わらずだし、このままでは息子たちの就職は考えられないから、少しでもお金を残しておかなければ子どもたちは生き延びられない、という思いから、私自身がスキルを身につけることにしました。選んだのはカイロプラクティックです。専門学校への入学は無事果たせたものの、骨格や筋肉・神経・基礎的な病理や解剖などの勉強にはついていくのも困難でした。医学用語については字が読めないところからの出発で、定期的に行われるテストに当初は赤点の連続。授業にビデオカメラの持込許可をいただき自分の頭で何とか追いついていこうと必死に取り組み、夜中の二時、三時までの勉強を続けるようになりました。

そんな私の姿を見ていたのでしょうか、この頃から長男が私に優しい言葉をかけてくれるようになりました。「お母さん、試験どうだった？」とか「炊飯器のスイッチは入れておくから、心配しないで気をつけて行ってらっしゃい」などと送り出してくれるようになったのです。

長男はその頃を境に、公開模試などを積極的に受けたりしながら成績をぐんぐん伸ばしていきました。そんな家の空気の流れの中で、今度は夫が会社勤務のかたわら「中小企業診断士」

を目指して取得し、さらに他の資格に挑戦し始めるなど、家族皆が目標を持つようになりました。

長男は四年かけて大学受験に挑戦した結果合格し昨春、無事卒業しました。大学卒業後も国家資格取得という新たな目標に挑戦することになりました。次男は高校認定（以前の大検）を取得した後、自らの意思で探したITの専門学校に入学しました。

次男はひきこもっていた当時体型も肥満傾向でしたが、今では見た目もごく普通の若者となり、「皆より年上なんだから若作りしなくちゃ！」と言いながら、今風のオシャレに余念がありません。

### 経験を生かした活動

私がカイロプラクティックの専門学校で二年間の研鑽を終え、卒業証書と皆勤賞を息子たちに披露すると、二人の息子が口を揃えて「お母さん、おめでとう！ よく頑張ったね」と褒めてくれました。

私はその後、自宅をリフォームし、ささやかに独立開業しました。この街で私を支えてくれたクリーニング店の奥様が口コミで次々患者さんを紹介してくださったりしたおかげで、自宅では手狭となり新たな店舗を構えました。家族のそれぞれが目標を持つことに

なつてからの我が家には、以前なら想像もできなかった最高の笑顔と会話が飛び交うようになりました。

その折、たまたま開いた読売新聞で「ひきこもり支援養成講座が開講された」という記事を見つけました。まだまだ沢山の当事者や家族がひきこもりに悩み苦しんでいる、私にも何かお手伝いできることがあるかも知れない、と思い立ち「一般社団法人ひきこもり支援相談士認定協議会」に問い合わせ、通信教育で養成講座を受講し「ひきこもり支援相談士」の認定を受けました。この講座を受講しながら、改めてひきこもりについて学び、自分と重ね合わせ過去を振り返りました。

私はひきこもり支援相談士の認定を受けた後、「全国ひきこもりKHJ親の会」の存在を知り、ここでの活動の素晴らしさに感動しました。私がずっと求めていた解決の鍵は既にあり、もっと早くここに辿りつけていたら…と今頃思うのです。

現在、私はひきこもり支援を行う全国四二カ所以上の団体が組織する「全国ひきこもりKHJ親の会」の一つである豊島区での団体「楽の会」の活動に、役員として参加させていただいています。会では、ひきこもり当事者の居場所の確保に加え、母親の居場所を提供したり、定例会・勉強会を

開いたり、医師や医療関係者等ひきこもり問題に取り組む専門家をお招きして講演会を開催するなど活発な活動を展開しています。

### 今、思うこと

私は「母親業・父親業のプロはいない」と自らを励まして生きてきました。誰もが初めて子を産んで育てる初心者であり、プロではないのです。その過程で試行錯誤しながら親も子も成長していく。それは机上の教育論で解決できるものでもありません。親の希望として自分が受けた教育以上のものを子に受けさせたい、と不登校をしていた頃には何とか学校へ戻したいと思いましたが、義務教育を終えた後に所属する機関を見つけることができなければ、家庭にひきこもるしかありません。親がわが子の将来を嘆いたり悲観するだけでは当事者を更に孤立化させるだけです。

ひきこもり問題はそれぞれの複雑な要素が入り乱れて、単に「ひきこもり」とひとくくりにできる問題ではありません。私自身、振り返って今さら反省しても遅すぎますが、自分のこの苦い経験を私と家族が歩んできた道として書かせていただきました。